

企画展

入り海の記憶 ～ 知られざる出雲の面影 ～



出雲を象徴する景観の一つに、城下町 松江を湖畔に映し出す宍道湖があります。宍道湖・中海は『出雲国風土記』に「入海（いりうみ）」として登場し、奈良時代から多くの動植物が生息し、「水の恵み」を享けてきました。

ただ、宍道湖・中海は動植物にとっての「恵み」だけではありません。このような「入り海」は、古代・中世において、内水面交通の要衝として政治・経済・文化上、重要な役割を果たしていたことがわかっています。とりわけ、そこに湊や役所が置かれることで、山陰・北陸地域では大きな意味をもち、出雲においても、出雲の地を育む母体となったといえます。

本展覧会では、「入り海」が、人々にとっていかなる存在であったのかを、考古・歴史・美術・民俗などの豊富な資料をもとに考えます。また、近世以降、「入り海」の陸地化と湊の消滅における人々の生活の変貌についても紹介し、失われつつある「入り海」の「記憶」をたどります。